

エストニア素描

タルトゥの柳

母の川という名のエモヨギ川の河畔には柳を思わせるしだれ枝の木々。海もないのにどこから住みついたのか白いカモメたち。赤紫にざらりと胸を光らせた鳩。ホテルの岸波に係留された遊覧船に旗が風にはためいていた。朝七時、出勤に急ぎ足の人びと、授業へと気の逸る自転車学生。このようにタルトゥの一日が始まる。気温は摂氏四度。五月半ばなのに冬服を着ている。時折は雨に雪がまじる。

プリマヴィスタ国際文学祭

好天に恵まれた文学祭は、子どもから大人まで楽しみに待たれていたらしく、街挙げてのイベント。三十六会場で繰り広げられる。京都御苑の大木の松に負けないうまい老木が緑陰を提供している。座ったら眠くなりそうな春の午後、人々は詩を聴いて、音楽に身を揺する。自由を謳歌する青春と、老人たちのコントラストに、子供たちの歓声が割り込む。



再会

市庁舎は薄いピンクの建物で、広場には大きなテント張りのブックフェアが催されていた。物見がてらに入ってみると「まりこさん」とタイミ・パヴェス女史の声が出た。二年ぶりの再会だ。思い出せば、京都に来られたのは翻訳の仕上げに協力していただいた一昨年の秋。その翻訳もついに完成し、こうしてエストニアで朗読会を開いていただく。再会の喜びと、連携の確かさを実感できた一日だった。

体現する詩人たち



音楽や朗読のステージも一つやふたつではない。至るところに貼ってあるポスターにわたしたちの写真もあった。とにかく自由、参加は自由ですべて無料。見なくては損という風で、まさしく春の喜びを分かち合う恒例行事である。若手詩人の実験的な音作りには感心するばかりだった。

エストニアの鶴

いつも海外詩祭に参加する度に、中西衛氏から書道作品を頂戴し、現地でお世話になる方々の贈物としている。今回は、日本詩人の朗読会と言うので、展示するとともに少々演出をした。作品をズラリと並べ、波野仁氏手作りのしおりもディスプレイし、さらに大きな折り鶴を配した。和服の朱が後ろの常緑樹が引き立たせていた。エストニアの尺八奏者と朗読で観客にはオリエンタルな雰囲気喜んでいただけた。





日本詩人の朗読会

ユーリ・タルヴェットはイタリアのコモ詩祭、コソボ詩祭、クラヨバ詩祭で一緒だったので、すっかりと打ち解けている。タルトゥ大学の教授で、ダンテの新曲を長年講義していたそうだ。タイミ・パヴェス女史は、タリン大学の教授で、日本文化に造詣が深い。この朗読会では、上村多恵子さんの12編の詩、すみくらまりこの12編の詩を、エストニア人の女優さんの訳詩つきで朗読した。

ミス・シャングリ-ラ

タルトゥ大学博士課程で学ぶベトナム人留学生が写真撮影をしてくれていた。その彼女が、書の「桃源郷」を指差し「これはなんと書いてありますか」と尋ねてきた。わたしは、「あなたの母国、北方にあると信じられている夢のように幸せな境地ですよ」と説明した。そして彼女も思い出した。その書を記念に上げた。以来、彼女のニックネームは ミス・シャングリ・ラとなった。詩をもっと読みたいと、写真の添え書きにあった。

レストラン「ピエール」



ようやく我々の朗読会が終わり、雨の中ランチに良い店を探し歩いた。フランス料理店ピエールに入って、豪華なアールデコ風の内装に驚く。エストニアの画家エデュアルド・ヴィラールの作品が飾られている。赤い風車の時代にパリで画業をしたという。国際的には知られていないがエストニアでは人気があり、ユーリも気に入っている。

インソムアソン

最終日にかけて「インソムニアソン」と題して、朝10時から翌朝10時までステージがある。「文学館」会場では一人三十分が与えられ、音楽や朗読をする。観客は自由に入出りできる。我々は夜8時から10時、そしてホテルに帰り、翌朝9時から10時のステージを鑑賞した。ディレクターはアメリカのホワイトヘッド氏。白い髭をきれいに編み込んでいた。我々を世話してくれる'カイジャ嬢はスペイン文学の博士号を取るため忙しくしているが、この夜ばかりは力強くブルースを歌っていた。

ミニスカートのアイーダ

詩祭も終わり、滞在最後の日は、オペラ「アイーダ」に招待された。モダンだとはきいていたが、衣装や道具立てが簡素なものと思いが、そうではなかった。まったく現代的解釈をされ、戦いと愛の相克を表現していた。いきなりスマホを持った男とミニスカートのアイーダが登場する。展開を述べたいが、別の機会にしたい。歌手がのどを休ませる長い幕間の休憩では、美しいホールでおしゃべりしながら飲物をいただく。



バスステーション

ホテルの六階から見下ろすのがバスステーションだ。誰もいない時間に、一人急ぐ老女。何をしに行くのか、歩くというより、行かねばという気持ちが体を前に進ませている。バスは次々に入り出ていく。我々もタリンまでの切符を買った。

旅の終わりに

夏は最高でも24度というエストニアは、静かで過ごしやすく快適だった。ホテルに隣接するショッピングセンターも、散歩に良い川岸も、心地よかった。大学を擁した旧都という点では京都と似ている。それでも電子政府やITを国策とする注目の国、我々はさらに文学交流を進めようと約束しタルトゥを後にした。